梅園学会ニュース

2013.4
No.159

「玄ならざるより玄なるはなく
玄より玄ならざるはなし」
莫玄於不玄、是以莫不玄於玄。
（『玄語』小冊人部天人の条末尾）

玄でないものほど玄であり、したがって玄ほど玄でないものはない。

玄でないものの中に玄を見い出し、玄の中に玄でないものを見る。玄というものを宇宙万物を構成している法則と言い換えれば法則とは思えない、或いは法則でないものの中に法則を見、法則の中に法則でないものを見る。現象の中に法則を見、法則の中に現象を見る。梅園の条理語で言い換えれば、次のようになるでしょう。

絮立（二）の中に混成（一）を見、混成（一）の中に絮立（三）を見る。

冒頭の命題は『玄語』小冊人部の冒頭の天人の条を結ぶ言葉です。この命題のすぐ前には次のような指摘があります。

「之を天地の主、万物の祖とすれども、而も貴きを加へず、之を瓦礫糞壤とすれども賤しきを加へず。之を捨つれば則ち髣髴として手に在り、之を取れば則洪蕩として垠りなし。」

それは天地の主、万物の祖だと言っても貴きを増したことにはならず、かれきやくそまみれの土だとしても賤しきを増したことにはならない。捨てても手の中にそれはあり、逆に手にとろうとしても広大であって限りがない。

これは梅園がとらえようとした条理、天地万物を貫いている法則（玄というもの）の形容であることがわかります。『荘子』知北遊篇に出る荘子と東郭子との有名な問答そのものですね。東郭子が道はどこにあるのか尋ねたところ、どんなものの中にもあると答えた荘子が、最後に屎溺（大便と小便。排泄物）の中にもあると言って東郭子を唖然とさせたあの指摘です。

ここまでわかって来ますと、またその前の文章も玄に関する描写であることがハッキリしてきます。（の把握）

「之を動せば則ち纏し（まとわりつき）、之を転ずれば則ち糊す（くっつく）。故にその象形を熟視し、その声音を熟聴し、その情性を熟識す。此を以て之を呼ぶも、猶且つその主を誤る。況んやその象形目の洞にすべきにあらず。その声音耳の暾にすべきにあらず。その情性摸索思量すべきにあらざるをや。之を呼して応せず、之を逆呼して戻らず。……」

暾とは明らかの意です。洞も同じ意です（洞察）。天（無意）の条理を人（有意）を以てつかもうとする。その困難さがよく描かれています。

人を以て天をとらえようとしてはならない。天を以て天を見なければならない。前者は「窺窬」であり、後者は「反観」です。

「反観」とは反観合一、即ち反して観、合わせて観る認識法のことですが、単にこのような定式化でわかったというものではなく反観するということは物凄く大変なことであることに改めて気づかせてもらいました。

物我の隔てを克服すること

天は無意（意識がない）のため、物我の区別がありません。物我の区別は意識を持つ人（広義）だけであり、とりわけ人間が熾烈です。

梅園は先づ能力差を例に挙げていますが、美醜の意識ひいては所有意識（貧富の差ほか）まで挙げています（同、天人）。

梅園は自分の力で食べていくことにつとめ、自分に与えられた仕事も天地の造化のはたらきを「賛（たす）けるものととらえ、それを怠りませんでした。これらはすべて「天」の意識にのっとっていました（天境では職業に貴賤はない）。「天」の意識にのっとった「人」としてのつとめを果す営みです。

他人を意識し、他人と自分を比較して他人を羨むことを梅園はなぜしなかったのでしょうか。天人の分合の関係をしっかりつかみ、それを実践していたというのが正解でしょう。

〈天人の分合〉

天人の反する所。一以てその分を観、一以てその合を観る。
（小冊人部、給資）

天人の分とは無意と有意の分（ちがい）です。人間の意識性を天（天地）の造化を賛ける方向で発揮して人間らしく生きること。のちに引用する「人徳を修し、人道を治めること」に当ります。これはそれほど理解に困難なことではありません。問題はもう一つの「天人の合を観る」方です。人間は生き物で自然の一部です。これが天人の合の一つです。これは誰でもわかっている自明のことです。かりたが、健康がそれを日々証明しています。

しかし、人間の意識の面では自明でなく意識のある人間が、何一つ区別も差別もしない自然（天）のレベルに到達するのは相当な努力なしにはできません。それに努めた人を梅園は「君子」とか「哲人」と言っています。

「是の故に、君子は天徳に通じ、天道を奉ず、人徳を修め、人道を治む。」（同上、天人）

「是の故に、屏の道を以て栄を求め、損の道を以て益を求め、死の道を以て生を求め、危の道を以て安を求む。哲人の畏るる所。衆人の履む所。」（同上）

天徳とか天道の要件は、同、通、誠、一です。これらの反対は、独、隔、偽、二で人のレベルです。天や天地は全体を意味します。天徳の一つとして「忘」を挙げています。

「忘は天徳なり、故に通ず。」（同、設施）

「反観」するとは同、通、誠、一に到達し、実践することです。「智の事、之を廓（広）にするに天を以てす」（同、人道）。目標が大きいのです。「人の能、人の達」を「己の能、己の達」とする「物我相通」を梅園は自然にできたのです。

［文責　小川晴久］